



甲子園に「しんきろう旋風」を 巻き起こした名監督

みやたけ ひでお
宮武 英男 (1908~1990)

宮武英男は、明治41年（1908）に福井県敦賀市に生まれた。旧制早稲田中学校、そして明治大学野球部のショートとして活躍した。昭和3年（1928）大学卒業後は、満州の野球の名門である「大連実業団」に入団し、8年間正選手を務めた。昭和11年（1936）に大連実業団を退団。現役を引退した。その後、戦争が激化し、日本は終戦を迎えた。運送関係の会社に勤めていた英男はソ連（旧ロシア）の満州侵攻により、シベリアに抑留された。

昭和23年（1948）に帰国。敦賀市の両親はすでに他界しており、妻の静枝の実家である魚津市北山に転居することになった。同年、大連実業団で活躍した経歴から、魚津東部中学校のコーチに就任し、中学生を熱心に指導した。昭和26年（1951）に魚津高等学校の野球部監督に就任し、教員ではない初の野球部専任監督となった。

英男は、勝つことだけに重点を置く当時の高校野球を批判し、野球の技術指導だけでなく、礼儀や生活態度、勉強にも厳しかった。妻と魚津高等学校の売店を経営していたこともあり、寝る時間以外は、一日中、学校で働いた。厳しい反面、人間的には優しく、誠実で温かい人柄であった英男は、オヤジさんの愛称で慕われ、部員だけでなく校内の生徒にも広く目を向け、相談にもよく乗った。

監督就任3年目の昭和29年（1954）に、魚津高等学校野球部は、春の県大会で初優勝をし、その2年後の昭和31年（1956）に春の北信越大会で初優勝をした。監督就任5年目であった。さらに、同年、日大三高（東京）等、甲子園の常連校を魚津市に招き、魚津市内の野球レベルの向上に努めた。そんな矢先、同年9月に魚津大火が起こる。市内の1,469戸が焼失し、7,291人が被災するという大惨事となった。焼け出された部員に、他の部員が野球道具を貸すなどチームの結束力で大火を乗り越えた。

昭和33年（1958）、魚津高等学校は初めて甲子園に出場した。次々に強豪校を下し、甲子園に「しんきろう旋風」を巻き起こした。準々決勝では、後にプロ野球選手となる板東英二投手を擁する徳島商業高等学校と対戦し、「0対0」の18回延長再試合となり、球史に残る名勝負となった。この試合が名勝負として語り継がれているのは、失策0という魚津の再三の美技が試合を引き締めたことや村椿投手が回が終わるたびに球をプレートにきちんと置いてくるなど、魚津高等学校のマナーの良さが全国から賞賛され、精神野球に力を入れる宮武イズムが垣間見られたことにあった。魚津高等学校の甲子園での活躍は、大火からの復興に苦闘する魚津市民への何よりの激励となった。また、雪国に野球は育たないというジンクスを見事に破って見せた活躍となった。

英男が魚津高等学校野球部監督を務めて12年。甲子園出場2回、春夏秋を通じて県大会優勝9回、北信越大会優勝1回等、輝かしい戦績を残し、昭和38年（1963）に監督を退任した。その後も魚津市総合体育館の指導員等を務めながら、少年野球の指導を行った。「子供たちに甲子園への夢をもたせたい。体の続く限り続けたい」と野球への情熱を生涯もち続け、平成2年（1990）82歳で他界。宮武監督率いる魚津高等学校が甲子園で巻き起こした「しんきろう旋風」は、今もなお、甲子園の球史に輝き続けている。

<専門員 飛弾 英樹>



練習の様子を見守る宮武監督（写真左）



帰郷した魚津ナインを熱狂的に歓迎する魚津市民